

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある時、この青砥左衛門、夜に入りて出仕しけるに、いつも火打ち袋に入れて持ちたる錢を十文取りはづして、滑川へぞ落とし入れたりけるを、少事の物なりければ、よしさてもあれかしと行き過ぐべかりしが、もつてのほかにあわてて、その辺の町屋へ人を走らかし、錢五十文をもつて松明を十把買ひて下り、これを燃して、つひに十文の錢をぞ求め得たりける。後日にこれを聞きて、「十文の錢を求めんとて、五十にて松明を買ひて燃したるは、小利大損かな」と笑ひければ、青砥左衛門眉をひそめて、「さればこそ御迎たちは愚かにて、世の費えも知らず、民を恵む心なき人なれ。錢十文はただ今求めずば、滑川の底に沈みて、永く失せぬべし。それがしが松明を買はせつる五十の錢は、商人の家にとどまつて、永く失すべからず。わが損は商人の利なり。かれとわれと何の差別がある。かれこれ六十の錢を一つをも失はず、あに天下の利にあらずや」と爪はじきをして申しければ、難じて笑ひつるかたへの人びと、舌を振りてぞ感じける。

（「太平記」から。）

（注）火打ち袋＝火打ち石などの火をおこす道具を入れる袋。

爪はじき＝氣に入らないときにするしぐさ。

（ア）——線1「よしさてもあれかし」にはどんな気持ちが込められているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 十文程度のお金だったらいしたことはないと軽視する気持ち。
- 2 たとえ十文程度のお金でも大切にしなければならぬと憤る気持ち。
- 3 たかが十文程度のお金にどうしてこだわるのかと疑問に思う気持ち。
- 4 たとえ十文程度のお金でもなくしたくないだろうと同情する気持ち。

（イ）——線2「小利大損かな」とあるが、どんなことをこう言っているのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 見つけた十文をすぐに使ってしまったこと。
- 2 落とした十文を人に頼んで探してもらったこと。
- 3 十文は見つけたが火打ち袋は見つからなかったこと。
- 4 落とした十文を五十文使って探したこと。

(ウ) —線3「舌を振りてぞ感じける。」とあるが、このときの人々の気持ちとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「青砥左衛門」の非常識な言い分に驚き、あきれの気持ち。

2 「青砥左衛門」の筋の通った考え方に納得し、感心する気持ち。

3 「青砥左衛門」の傲慢な言い方に反発し、憤る気持ち。

4 「青砥左衛門」の真剣な態度に心を打たれ、賞賛する気持ち。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「青砥左衛門」は、川に落とした十文を惜しがるほどのけちだったので、周りの人間からは嫌われていた。

2 「青砥左衛門」は、お金は世の中に出回ってこそ役に立つという考えの持ち主だったので、川に落とした十文を必死に探した。

3 「青砥左衛門」は、商人から五十文で松明を買ったが、すぐにそのお金を取り戻すことができたため、結局一文も失わなかった。

4 「青砥左衛門」は、お金がいかに大切かを世間にわかってもらうために落とした十文を探したが、人々は誰も取り合わなかった。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、高忠^{たかただ}といひける越前守^{えちぜんのかみ}の時に、いみじく不幸なりける侍^{さむらい}の、夜昼まめなるが、冬なれど、帷^{（注）}をなん着たりける。雪のいみじく降る日、この侍、清めす^{（掃除をすと言つて）}とて、物の憑^つきたるやうに震ふを見て、守、「歌詠^{よめ}め。をかしう降る雪かな」といへば、この侍、「何を題にて仕^まるべき」と申せば、「裸なる由^{よし}を詠め」といふに、程もなく震ふ声をささげて詠みあぐ。

はだかなる我が身にかかる白雪はうちふるへども消えせざりけり

と誦^よみければ、守いみじくほめて、着^きたりける衣を脱ぎて取らす。北^{（注）}の方も哀れがりて、薄^{（薄紫色）}色の衣のいみじう香ばしきを取らせたりければ、二つながら取りて、^{（丸くまとめて）}脇に挟みて立ち去りぬ。侍^{（注）}に行きたれば、居^ゐ並^{みな}みたる侍ども見て、驚き怪しがりて問ひけるに、²かくと聞きて、あさましがりけり。

さてこの侍、その後見^{のち}えざりければ、怪しがりて、守尋ねさせければ、北山^{（注）}に貴き聖^{（徳の高い僧）}ありけり。そこ

へ行きて、この得たる衣を二つながら取らせて、いひけるやう、「年まかり老いぬ。身の不幸、年を追ひてまさる。この生の事^{（役に立たない身）}は益^{（やく）}もなき身に候^{（まを）}めり。後生^{（来世）}をだにかでと覚えて、法師にまかりならんと思ひ

侍^{（注）}れど、戒師^{（戒めを授けてくれる師）}に奉るべき物の候^{（まを）}はねば、今に過^{（す）}し候ひつるに、³かく思ひかけぬ物を賜りたれば、限なく嬉^{（うれ）}しく思ひ給^{（たま）}へて、これを布施^{（ふせ）}に参らするなり」とて、「法師になさせ給へ」と涙にむせかへりて、泣く

泣くいひければ、聖いみじう貴みて、法師になしてけり。さてそこより行^{（ゆく）}方もなく失^{（う）}せにけり。在所^{（ありどころ）}知らずなりにけり。

（「宇治拾遺物語」から。）

（注）帷＝裏地のない夏用の着物。

北の方＝身分の高い人の妻。ここでは「高忠」の妻を指す。

侍＝侍所。侍たちが待機している詰め所。

北山＝京都の北方の山々。

(7) 線1「いみじく不幸なりける侍の、夜昼まめなるが」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 たいへん不幸であった侍で、夜どおし農作業をしていた者が
- 2 たいへん不幸であった侍で、夜も昼もまめに節約していた者が
- 3 たいへん不幸であった侍で、夜も昼も真面目に働いていた者が
- 4 たいへん不幸であった侍で、一日中健康に過ごしていた者が

(イ) —線2「かくと聞きて、あさましがりけり。」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「侍」が見事な歌を詠み、褒美として二枚の着物をもらったことを聞いて、見えすいたうそをつくとは情けないことだと思った。

2 「侍」がうまく歌を詠み、褒美として二枚の着物をまんまと手に入れたことを聞いて、侍の行いのいやしさにあきれた。

3 「侍」が歌を詠んだのに、褒美として二枚の着物しかもらえなかったことを聞いて、主人の心の狭さにがっかりした。

4 「侍」が見事な歌を詠み、褒美として二枚の着物をもらったことを聞いて、侍の歌の才能と幸運な出来事に驚いた。

(ウ) —線3「かく思ひかけぬ物を賜りたれば、限なく嬉しく思ひ給へて」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 この着物のように思ってもみない物をいただいたので、戒師に差し上げる物ができたことをこの上なくうれしく思いました

2 この着物のように望みどおりの物をいただいたので、不幸なばかりの現世ではなかったとこの上なくうれしく思いました

3 この着物のように思いもよらない物をいただいたので、よいお布施をいただくことができたところの上なくうれしく思いました

4 この着物のように望み以上の物をいただいたので、よい人を法師にしてあげられることをこの上なくうれしく思いました

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「侍」は、「高忠」から裸になって歌を詠むように命じられたので、寒さとおそれに震えながら歌を詠んだ。

2 「高忠」は、「侍」の歌の出来はえを褒めて着物を与え、「高忠」の妻も香りのよい着物を「侍」に与えた。

3 「侍」は、これまでの人生は不幸であったが残りの人生は豊かな生活をしたと思って、法師になろうとした。

4 「聖」は、着物を受け取る代わりに「侍」を法師にさせると言ったきり、どこかへ去って行方がわからなくなった。